

優秀賞

机上の空論からの一歩

ぐんま国際アカデミー中部部 3年 大津 里穂

ダブルリミテッドという言葉を知っていますか。二つの言語を使う環境にしながら、どちらの言語も年相応のレベルに達していない状態のことです。日常生活では困ってなくても、学習するための言語習得が十分でなく授業についていけず、自分は勉強ができないと思い込み、生活が荒れてしまったり将来の夢を持たない子ども達があります。

「大泉町に住んでいる外国籍の子ども達の教育について意見をいただけませんか」

今年三月、地元テレビ局からの突然の連絡に驚きました。確かに、私は地理の課題で在日ブラジル人の子ども達の言葉の問題を調査し、言葉の支援教室を提案する発表をしました。ただ、それは机上の空論に過ぎません。

外国人が人口の二割を占め、その多くがブラジル人という大泉町。三十年前に出入国管理法が改正されたことで工場で多くの外国人が働くようになり、町でも、その子ども達の教育に独自に取り組んでいます。身近にダブルリミテッドの子ども達がいると知ったとき、とてもショックでした。

取材前に、視聴者から苦情が寄せられる可能性があるという説明がありました。生活保護を受けている在留外国人に反感を持つ住民もいることは知っていました。ブラジル人というだけで「公民館を使うな」という声を浴びせられた人もいます。そう言われた人の悔

しさも、言った人の不満も、私には想像することしかできません。公の場で発言する緊張感をもって「誰もが平等に夢を持てるような環境になってほしい」と話しました。

放送では、日本語も母語も十分に話せないまま社会から取り残されることのないようにという思いでバイリンガル教育を目指し、三十年近く子ども達に寄り添ってきた大泉町のブラジル人学校が経営難で休校した話題が取り上げられました。放送後、その学校の理事長さんに「関心を持ってくれてありがとうございます」という言葉をいただき、私は何もできないもどかしさでいっぱいになり、学校の再開を願う気持ちを手紙にして送りました。

日本の労働力不足を補ってきた外国人労働者の子ども達の教育の厳しい現状を、一人でも多くの人に知ってほしいです。もし彼らが母国で育っていたら、言葉の問題で社会から取り残されることはないと思うからです。

「人や国の不平等をなくそう」、SDGsの目標のひとつです。中学生が社会のために実際に何か行動を起こすことは、まだ難しいです。それでも、社会問題に関心を持ち、調べて、考えて、社会に向けて発信はできます。ただし、自分の言葉に責任を持って。

私は、この教育の問題をきっかけに国際協力に関心を持ち、学校の職場体験でJICA高崎分室を訪問し、国同士が助け合う必要性を学びました。関心を持つことで自分の中で何かが変わる。その変化が集まって世界を動かしていく。きっと良い方向へ。そう信じて今の自分のできることから一歩ずつ。